



経営の散歩道 一五〇回

川中経営所長 川中清司

日本情緒あふれる

石畳の諏訪町通り

照らしていた。

八尾文化会議で町起こしへ

八尾町の諏訪町通りは日本の道路百選の一つに選ばれている。若宮八幡宮から専能寺を経て諏訪神社までの約三百メートル。石畳の道の両側に並ぶ民家は、格子戸や柱などが黒で統一され、瓦の屋根、白い壁などが調和して民芸の里のムードが漂い、肩を寄せ合って建つ古い民家が懐かしい日本情緒を醸し出す。

「ちよいと、そこ行く旅のお人」と、粋な姉ごが二階の手摺り廻りから声をかけてきそうだが、そう言えばこの諏訪町通りには長谷川伸の小説「一本刀士俵入り」のお薦めのモデルの生家や、高橋治の小説「風の盆恋唄」のロケ現場となった家もある。「わたしや野山の兎じゃないが月夜月夜にオウラ逢いに来る」「野口雨情の歌を刻んだ石灯籠の灯りが、ほのかに秋の夜道を



街づくりは人づくり

その13

風の盆 八尾町のまちづくり(2)

たが今は四五〇〇人に減った。商店数も二〇年前の半分となり一五〇店に減り、年間小売総額はようやく一八〇億円を維持している。

近くに中核工業団地があり、電子部品など七〇社が進出し年産一二〇〇億円をあげており、先端産業と商業の共生への模索が続けられている。

四七年の広域商業診断で、駐車場の整備が緊急課題で急がね

ば商業は潰れると指摘され、共同駐車場にとり組んだが購買力の流出は止まらず三五%にも達している。

六〇年に町おこし運動が始まった。特筆すべきは八尾文化会議だ。東京大学の月尾嘉男教授らを招き五年間続けて町の方向性について徹底論議を繰り広げた。町の方方で分科会を開き多くの住民が参加した。

結論は伝統を見直すこと。街並みを復権し白壁の家を残し、手仕事を直し、若手を育成し

大工技術を継承するといった具休案が出来上がった。これらを八尾ルネサンスに繋いだ。和紙、家具、陶芸、彫刻などに携わる人達が「手仕事の会」を作り、若手の育成や事業の継承へと動きだした。

八尾の街並み全体を舞台にして「坂のまちアート」事業が始まった。「八尾市民大学」も自発的にできた。

民芸調住宅の改造から

中心地活性化へ

諏訪町通りを石畳にしたのを機に、伝統を守る意気込みが急速に高まり、町民が自発的に住宅を古風な民芸調に改装し始めた。人口が減り空家が増えた分だけ家の間口を広げるのに活用できた。

平成七年から二年間、住宅マスタープランを押し進め、これを一〇年の中心市街地活性化の基本計画の中に活かし、十一年には「ぶらり八尾」と銘打った活性化事業へと進み、十二月には町のTMOを立ち上げた。

八尾町のTMOは商工会型で、会の事業の一つとして位置づけている。会長が基本計画の委員長になり、行政側も積極的に商工会の事業をバックアップし両者の結束は堅い。

風来坊など三つの拠点と

市民協力の盛り上がり

八月には曳山展示館から諏訪町通りに向かう一角に、シャッターが降りていた倉庫などを活用して三つの拠点作りに成功した。情報発信と休憩所を兼ねた

「風来坊」と、ガラスと木工の実験ショップの「風まかせ」。いずれも観光協会の経営でこれらの設備費二千万円の七五%は県などの補助で賄い、「風の館」という特産販売所も設備費八百万円の半分は補助がおりた。店の中に美術品を並べてお客の目を楽しませる「店のギャラリー」や、白布に好みの一文字を筆で書いて店頭に掲げるなど各店が賑わいの創出を考えた。銀行のウィンドウや民家の出格子にもすだれを下げ竹カゴに花を生けて飾るなど、市民全体のまちづくり協力が始まった。目標は繁華街を造ることではない。風の盆、曳き山祭りなどの伝統を守り、三百年続いた八尾の文化をさらに高め育てていくことだ。これが「商店街の人たちの動機づけとなって活力につながる」のだと、八尾商工会の中村美智則事務局長は言う。隣り町に北陸で屈指の巨大SCがオープンした。八尾町の全小売面積をはるかに上回りその影響は大きい。しかし、地域の文化と伝統に息づく市民生活を守る町づくりの機運はますます高まっている。